

明治大学国際交流講演会 I-AUD Evening Lecture 2025 #1

place-time continuum

CULTURE,CONTEXT,IDENTITY,RECENT WORK

(講師：Architect Balázs Bognár)

2025 年 4 月 17 日

理工学研究科 建築・都市学専攻国際建築都市デザイン系(I-AUD)は、4月17日に建築家を Balázs Bognár 招き、place-time continuum と題した講演会を開催した。駿河台キャンパス移転後最初の講演会で、I-AUD 修士1年生2年生を中心に本学講師・博士課程学生も含め、45名が参加した。一部は学外からの参加者も見られ関心度の高い講演会となった。

Balázs Bognár 氏はイリノイ州出身のアメリカ人建築家で、ハーバード大学の GSD を修了した後、Boston の設計事務所で実務を経験した。その後、日本の隈研吾建築都市設計事務所に加わり、2007年から18年以上に渡り海外プロジェクトを中心にパートナーとして実務経験を重ねてきたことから、I-AUD に在籍する外国人学生からは I-AUD 修了後、日本で働くことについても多くの意見が交わされた。

講演では Bognár 氏が隈研吾建築都市設計事務所のパートナーとして手掛けた多くの海外プロジェクトが紹介されたが、多くのプロジェクトが日本の伝統建築を参照している点が特徴的であった。またプロジェクト紹介の前に、導入として彼らの設計活動の原風景となるイメージをいくつか紹介していただいたが、その中でも建築の要素といえるものは床しかない「桂離宮の月見台」の写真の空間への言及は次章以降のプロジェクトで、彼らの設計手法が一貫して周辺環境や自然素材に着目していることをよく表していた。

オレゴン州 Happy Valley に建築された suteki house(2017)では、アメリカのコロニアル様式の邸宅が並ぶ閑静な住宅街に対し、同じ様式を用いるのではなく、敷地内の地形や水脈に着目し、桂離宮を引用した雁行型の空間と落水荘を参照した浮遊する縁側によって周囲と全く異なる建築様式でありながらその地形に適した空間が実現されており、建築設計における場所性の読み解き方を実例を通して解説いただいた。

ポートランド日本庭園 カルチュラル・ヴィレッジ (2017) は、日本庭園へ至るアプローチとエントランス、チケットパビリオンを整備するランドスケープと建築のプロジェクトであったが、そこでは日本の大徳寺 高桐院のアプローチが参照された。元々、一部車道と歩道が混在していたアプローチを SW Kingston 通りの入口から完全に歩車分離し、より長く森の中を抜けてから日本庭園へ至るアプローチが採用された。チケットパビリオンのあるエントランスエリアはカフェやギフトショップ、ラーニングセンター、インフォメーションセンター等複数の建物から構成されているが、それらは桂離宮を参照した雁行型によって来訪者の視線を導く奥行きを作り出していた。

他にも、スカイスクレーパーのファサードデザインにおける足元のデザインの重要性や、飛騨の伝統的な

木組みである千鳥格子を家具のスケールから建築のスケールまでスケールを横断して展開する手法など幅広くデザインへの取り組みをご紹介いただいた。

I-AUD の学生の多くは学部4年間で建築を学び、都市スケールのデザインスタジオに取り組むのは、前期の Advanced Design Studio A が初めてである。彼らにとって隈研吾建築都市設計事務所の都市スケールの設計方法論について意見交換できたことは、とても有意義な機会であった。



会場の様子 1



会場の様子 2